
守護神

大河 悠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

守護神

【Nコード】

N8603C

【作者名】

大河 悠

【あらすじ】

ある組織のエージェントである俺は、副業の証券会社の接待に來ていた。そこで、追ってる組織の重要な手掛かりをつかむとも知らずに――。第一部完結しました。

第一話：鬼神（前書き）

今回は自分の趣味丸出しで書きました。筆者の気まぐれにお付き合い頂けたら、光栄です。

第一話：鬼神

俺は副業の証券会社の取引に料亭に来ていた。いわゆる接待ってやつだ。

俺が、何故二ホンの証券会社で働いているのかと言うと、ある組織の資金供給源が二ホンにあるという情報が入ったからだ。で、その組織が、俺達が所属してる機関の大元である国にちよっかい出して、国としてはすこぶる邪魔なワケだ。それで、二ホンという閉鎖的な国（最近ではそうでもないらしいけど）に馴染むために、東洋系の顔である俺、佐伯（偽名）と山田さん（もちろん偽名）が派遣された。流暢な日本語を操る俺と山田さんに周りは俺たちが日本人だと疑わない。普通、世界では、よく中国人に間違われるのだけだ。

ちなみに、山田さんは俺が機関に入ってからずっと組んでいる良きパートナーだ。いつも暴走する俺の後ろで冷静に構えて、戦況を良く見極める。山田さんがいなかったら、きっと俺の命が両手ほどあっても足りなかっただろう。

俺は取引き相手の面々を見た。完全に出来上がったオヤジ三人に、ずいぶんと若い、優男一人。なんでも、御曹司らしい。

そいつは、箸で食べれるように細長く切つてあるステーキを、女中に用意してもらった、料亭には似付かわしくないナイフとフォークでさらにコマ切りにしながら、優美に食べてた。隣では、山田さん、もとい、山田課長と、上司がペコペコしながら、取引先の奴らに酌をしている。

ここで、なんで、山田さんが平の俺よりか、地位が高いのかって、言っと、ネンコウジョレツという日本の風習らしい。確かに、俺と山田さんは歳が十離れているが、それで地位が決まるのは、不服だ

った。それに、接待というものでなんでこんなに、ペコペコしなければいけないのかもわからない。確かにコネクションは大事だけれど、日本のやり方は気に入らなかった。俺は、まだこの国の伝統に慣れない。

一方で、ペコペコする山田さんは、俺から見ても本物の日本人と遜色ないくらい、その姿が板についていた。それを見て、俺は、*de r Damon*（鬼神）とまで呼ばれた男が…。と、なんだか悲しくなった。

第二話：守護神

山田さんが俺の肘をこづいてきた。酌をしろということなのだろう。俺はビール瓶を持って、渋々立ち上がると、優男のもとへ向かった。

「瀬野取締役どうぞ。」

「どうも。」

そう言うと、嫌味なくらい優雅な振る舞いで、俺が注いだビールを飲み干した。

宴もたけなわといった時のことだった。俺がいつ帰れるのだろうか
と、うんざりしていると、

「うぐっ!!」

と変な声を上げて、取引先のオヤジの一人が倒れた。その腕には、瀬野がさつきステーキをコマ切りにするのに使っていたナイフが刺さっている。ハッとして、俺が目線を向けた時は、もう遅かった。その先には、瀬野に捕らえられて、銃口を向けられた山田さんがいた。

「動くな!!」

瀬野の怒号が響くと、逃げようとしていたオヤジたちはその動きを止め、目を白黒させていた。瀬野は口元を吊り上げ、言った。

「der Demon（鬼神）と呼ばれた男も落ちたもんだよなあ。だから、Prayer（祈る者）なんて、呼ばれるようになるんだよ。なあ、祈られてる、Patron saint（守護神）？」

俺達の二つ名を知ってるってことは、やっぱり、こいつ——!!

俺は、凄みを利かせて、瀬野を睨んだ。

「そんな顔したところで、こっちが怯むかよ。」

そう言い、瀬野は窓際へ後退していく。マズイ。何か策は無いか——!!?

その瞬間だった。瀬野の手から、銃が滑り落ちた。俺は、その機会を逃さず、銃を取り出す。しかし、瀬野の動きは敵ながら、見事だった。自分の体に起きた変化に狼狽えず、こちらが見惚れるような素早さで、山田さんの鳩尾に一発くらわせた。山田さんがうなだれるのと、俺が銃を構えるのは同時だった。

「ビールに何を入れた？」

瀬野は足を僅かに震わせるも、東洋系としては大柄な山田さんを抱え、しっかりと立っていた。俺はその様に瞠目した。あんなに体を麻痺させる薬飲んでおいて立っていられるだー！？

「誰が言うかよ。」

「なら、質問を変える。いつからわかっていた？」

「いや、こんな料亭で箸使わないで料理食べてる奴を疑わない方がおかしいだろ。」

「なるほど。勉強不足だな。」

瀬野は苦々しげにそう言うと、窓から飛び降りた。

「待て！！」

俺が、放った弾は、虚しくもかわされ、虚空に消えた。

「銃の腕は組織一と言われた俺の弾をかわすとは。」俺は唇を噛んだ。そして、細い体のどこにそんな力があるのか、山田さんを抱えたまま、俺とぐんぐん距離を離していく。全く薬は効いてないようだった。

瀬野の降りた先は駐車場だった。俺は瀬野の目的がわかったと、舌打ちをして、瀬野と同じ様に、料亭の二階の窓から飛び降りた。そして、瀬野とは反対方向に向かった。

第三話：選択（前書き）

自分の小説に突っ込みどころ満載で、嫌になる今日この頃です。筆者の想像力ではこれが限界なので、皆さん暖かい目で見守って頂けると嬉しいです。

第三話：選択

俺はそのまま自分の車へ走って行くと、エンジンをかけ、瀬野の車を追った。

異変に気付いたのは、瀬野の車を追いかけて少しした所だった。

俺は瀬野の後ろにぴったり附いた。猪突猛進といった勢いで、二台の車が駆け抜けていく。深夜であることが幸いだった。俺達は、しばらくそのままの状態を維持し、カーチェイスを続けた。俺は、それ以上スピードをあげることが出来なかった。俺は、ここに派遣された時に、有り合わせの車を選んだことを激しく後悔した。そして、異変に気付いたのだった。

「おかしい。」

もし、山田さんの誘拐が目的なら、ずっとスピードを上げて、俺を振り切れればいい。それは、とても簡単なことだろう。振り切れないとしても、相手はあの料亭で落とした銃しか持ってないとは考えにくい。ならば、銃でパンクさせるなり、フロントガラスを割って、俺を攪乱させればいい。それらをしないってことは――。

俺はそこまで考えて、気付いた。

「目的はこのデータか！」

俺は助手席のアタッシューケースを見遣った。その中には、今日の接待が終わった後、本部へ送る手筈になっていたディスクがある。それは、俺が掴んだ組織の重要機密事項が記されている為、仲介人と落ち合い、手渡しする予定だった。

俺は、車のスピードを緩めた。瀬野との距離はどんどん開いていく。悪態をつくと、ハンドルを叩いた。

「くそっ！」

俺は今、仲間の命と、重要な情報。どちらをとるか、選択を迫られ

た
↓
。

第三話・選択（後書き）

出来たら、今日中にもう一話投稿します。

第四話・由来（前書き）

なんとか、今日中に間に合いました!!

第四話：由来

答えなんて考えなくても、ハナから決まっていた。

「くそっ！」

俺はもう一度悪態をつくど、アクセルを全開にした。瀬野の車に追いつくべく。

patron saint（守護神）は、諜報員のくせに人を殺せない俺を皮肉って付けられた二つ名だ。

俺はこんな仕事をしていて、直接は一人も人を殺したことはない。間接的に、俺が意図せず撃った弾が致命傷になったことはあったが。新米のころは、よく臆病者と罵られたものだ。

そのせいで敵を取り逃しては、何度も、実戦に関わらない部署に異動させられた。こんな考えが罷り通るほど、甘い世界じゃないことはわかってる。だから、俺は一心不乱になって銃の腕を磨いた。そして、こんな性癖があっても、他の奴らに匹敵するくらい、いや、それ以上の実力をつけるに至ったんだ。

俺は、この国の風習は気に入らないが、この国の考えは気に入っている。確かに、金で何でも解決する、腹で何を考えてるのかわからないと様々な国に批判されているが、それでも、戦争に手を染めず、平和主義を掲げるこの国を俺は、嫌いではない。自国を守るために、武器を取った俺の祖国と、自国を守るために、他の機嫌とりをし、ヘコヘコして、金ですべてを解決するこの国、どちらがいいのだろうか。俺にはわからない。

人を殺せないpatron saint（守護神）が、仲間の命を、まして、ずっとパートナーを組んできて、俺の考えをずっと支持し

てくれ、俺のペナルティーを連帯責任で負っても文句一つも言わないような、恩人である山田さんの命を、どうしても見過ごすことができるだろう。

「できるはずない！」

俺はさらに、目一杯クラッチを踏んだ。

第四話：由来（後書き）

今回、一文が長くなってしまい、読者のみなさんにはご不便をおかけしました。今後は気を付けます。次回は戦闘シーンを書けるといと思っています。今回書いてて、作者もあんまり面白くありませんでした。でも、物語のつながりとして重要なので、ご勘弁を。

第五話：根城

そうして、瀬野の追跡を続け、相変わらず膠着状態のまま、俺達は一本の山道に入った。そこで、瀬野は突然スピードをあげた。俺は、距離をあげられ、瀬野の車は道の向こうに消えていった。道案内はここまでということだろう。道は一本道で迷いそうもない。俺は、その道を出るだけ急いだ。

着いたのは、廃ビルのような建物だった。

霧深い山の風景と相まって、さながら、幽霊屋敷のような風貌だ。俺は、愛用の銃を持ち、ディスクを手のひらサイズのケースに入れ、胸ポケットに忍ばせた。ちなみに、このケースは、うちの組織が開発したもので、いくら銃を打ち込んでも、ほとんど傷がつかないほど頑丈だ。もちろん、生体認証システムが付いていて、俺の血が通わなくなったら、つまり、死んだら、開けられないようになっていく。

そして、俺は建物へ向かった。

俺はそびえ立つ建物を見上げた。それは四階建てのようだった。普通、罨が張ってあるような所に、そのまま突っ込むバカはいない。通風孔を通ったり、壁伝いに屋上まで行ったり、せめて、裏口などから入るようになるだろう。だが、敵もバカじゃない。少なくとも瀬野は頭が切れる。そういったことの対策はきつと講じてあるだろう。そこまで考えると、俺は覚悟を決め、正面のドアから入って行った。

そこは一つの開けた場所になっていて、剥き出しのコンクリートの壁や床は、さながら倉庫のようだった。建物の中は薄暗く、先はよく見えない。だが外観よりは広そうだった。

俺は、敵の策がわかって舌打ちした。きっと、この開けた場所で、数に物を言わせて、俺を仕留めるつもりだろう。こんな障害物のない場所で攻められたらひとたまりもない。

俺は、周囲を警戒しながら進むと、ぼんやりと人影らしきものが見えてきた。けれど、人の気配はその他にはしなかった。俺は、拍子抜けしたが、これも策の内かと、いよいよ警戒を強めその人影に近づいて行った。

第六話：女

「女!？」

俺は相手の顔が見える所まで来ると、素っ頓狂な声をあげた。俺は相手が女だから驚いたのではない。もしも、そこにいるのが、武装した女だったならば、俺はここまで驚かなかっただろう。

その女は、この場に相応しくない、赤いサテン地のドレスを着ていた。そのままどこかのパーティにでも行けそうな格好だ。明らかに俺を挑発してるとしか思えなかった。

「最悪よね。セノつたら、外国から帰ってきて、やっと二人でゆつくりできると思ったのに、マネーローダリングを私に押しつけて、またどっかに消えたと思ったら、今度は、戦えだなんて。それが、仮にも彼女に言うことって思わない？」

そう女は、捲し立てると、妖艶に笑った。瀬野つてそのままコードネームだったのか。とか、こいつ瀬野の女なんだ。自分の女戦わせるなんて瀬野つて最低な男だな。とか、てかこんなに組織の情報バラしているのかよ。とか、女の発言に突っ込みたいところは山ほどあったが、それらを飲み込むと、俺は言った。

「あんたが相手か。」

「そうよ。」

女は余裕綽々といった様子だ。

「俺もなめられたもんだな。」

「あら、あなただからこそ私が相手なのよ。Patron saint（守護神）さん？」

そう言うと、ブロンドの髪をゆらして女は笑う。俺はその女の目を見ると、背筋が凍り付いた。女は相変わらず微笑んでいた。その笑みは、先程までの男をくどくようなそれと変わらない。しかし、その目はぞつとするような深さをたたえていた。俺の本能が警鐘を鳴らす。強い——そう直感した。

先の女の発言を思い返すと俺は悟った。ここは資金集めのためだけの奴らの根城だということ。そのための工作員しか存在せず、戦力になるような者はほとんどいないということ。そして、戦闘に関しては、おそらく、こいつは瀬野に次いで強いということ。空気が変わった――。

第六話：女（後書き）

女とのやり取りが予想以上に長くて、戦闘シーンが書けませんでした。できたら今日中、遅くとも深夜までには投稿します。

第七話：戦（前書き）

遅くなって、申し訳ありませんでした。眠くなって、最後の方文章
ぐだぐだですー

第七話：戦

「セノが構ってくれなくて、暇してたのよ。楽しませてちょうだいね？」

そう女が笑った。その時だった。俺の足場が崩れた。いや、正確には、俺が乗っている床が二つに別れ、下側に折り畳まれたのだ。俺は反射的に、天井から懸垂線を描いている鎖に掴まった。

「つつ！」

その瞬間だった。鎖を掴んだ左手に痛みが走った。よくよく鎖を見てみると、ノコギリの刃のような刺が無数に付いている。左手から血が滴り落ちた。

「溺れる者はわらをもつかむってね。わらじゃなくて刺だけど。すぐに手を放さないなんて、エライエライ。」

女はそう言うのとバカにしたように笑って、手を叩いた。俺としたことがうかつだった。不自然に天井から垂れ下がっている、たくさんの鎖を疑うべきであった。俺は状況を打開すべくあたりを見回した。

「よそ見なんてしていいいの？」

女はドレスのスリットから、太股に留めてあるベルトに下がっているナイフを数本取り出すと、

「まずは、右肩！」

と、その内の一本を投げてきた。それは、正確に、鋭い狂暴さでもって、俺に迫ってくる。俺は左手を軸にして体を揺らし、紙一重でそれを躲した。だが、息をつく暇もなく、次のナイフが左肩に飛んでくる。俺は左手に力を入れ、なんとか避けた。

「ぐっ！」

最初のナイフを避けた時以上の痛みが左手に走る。だが、敵も待つてはくれない。今度は左右の足にも、ナイフが飛んできた。俺は懸垂をするようにそれを避ける。途端に、左手に尋常でない痛みが走った。それでも、意識を保ち、鎖に掴まっていられるのは、訓練の

賜物だろう。

「なかなかやるじゃない。でも、これで終わりよ。」

そう楽しげに女は言っていると、鎖に掴まっている俺の左手目がけてナイフを放った――。

もし、俺がここで諦めるような奴だったなら、俺はとっくの昔に死んでいただろう。

俺は銃を取り出すと、鎖の、女とは反対側の天井に留まっているところを撃った。鎖は振り子のように揺れた。

「ぐあつ！」

鎖が天井に垂直になった時、俺は悲鳴を上げた。自分の体重分の負荷がかかり、手が削られる。だが、決して、左手は放さなかった。そして、床のある所の真上に来た時、やっと、俺は手を放し、鎖から解放された。

そして、その勢いを殺さずに女の所まで駆けると、右の拳を突き出した。だが、女はそれをあっさり翻すと、俺の鳩尾を狙って、拳を繰り出してきた。そのあまりの速さに、俺は受け流すことを諦め、歯を食い縛って、来たる衝撃に備える。だが、それが決まった時、たいしたダメージは負わなかった。相手の打撃は素早い、重みがないことがわかる。俺は力でこり押しすることにした。渾身の力で一撃を放つ。女は腕を交差させてそれを受けとめる。だが、威力を殺し切れずにバランスを崩す。俺はその瞬間を見逃さなかった。俺は女の左胸に銃口を突き付けた。

「おまえの負けだ。降参しろ。」

「はい、わかりました。――なんて、言うと思った？」

女は開き直り、俺が銃を持っている右手を掴むと、手前に手を引き、銃口を左胸から少し外し、俺の足を払った。俺は見事なまでにバランスを崩し、尻餅をついた。その瞬間俺は発砲した。女の左の肩に当たったようだった。だが、それも女の動きを止めるには至らなか

った。女は、俺の待てという静止の声を聞かず、床が折り畳まれて、穴になっていく所に飛び降りた。

女は、俺が人を殺せないために、あの状況では撃たないとみて、あんな大胆な戦略に出たのだろう。俺はそのあまりにもリスクの大きすぎる行動に驚き、呆れると共に、それをやってのける彼女の勇氣に感服した。

そして、優先すべきは、山田さんの救出だということを思い出し、彼女を追いかけるのは諦めた。

第七話：戦（後書き）

ハイペースで書ける内に書いておこうということで、今まで一日二話を目標にしていたが、間に合わなくなりそうなので、明日から一日一話を目標にしたいと思います。作者の身勝手な都合で変更して申し訳ありません。

第八話：三階（前書き）

今日見たら、アクセス数が百五十越えてました！！一重に読んでくださるみなさんのおかげです。ありがとうございます！拙い文章ですが、これからもお付き合いくださると幸いです。

第八話：三階

俺はシャツの袖の部分を破って、左手を止血しながら、そのまま進んで行くと、階段があった。どうやら、一階はこのただっ広い空間以外に部屋はなさそうだ。俺は階段を上って行った。

すべての階は同じような造りになっていた。階段の踊り場ぐらいのスペースがあるだけで、部屋への道は金属の分厚い扉で閉ざされている。俺はすべての階の扉と、屋上へ続く扉を調べた。わざとらしく、三階以外の扉は鍵が掛かっていた。しかも、ご丁寧に、そこだけ明かりがついているのか、扉の隙間から光が漏れ出ている。きつと、二階と四階に作業員を潜ませて、俺を囲むつもりだろう。いくら素人と言えども、こんな狭い所で囲まれ、相手が銃を持っているならば、俺でも分が悪い。

俺はピッキングの道具を車に忘れたことを後悔した。戻ろうにも、一階の穴のために戻れない。

俺は唇を噛んだ。考えあぐねていても、しょうがない。俺は扉の横についている窓を銃で割り、囲まれた場合の逃げ道をつくると、意を決して、ドアを開けた。

細い隙間から、中を盗み見る。

中は、等間隔にパソコンが配置され、オフィスのようになっていた。そこで白衣を着た連中が、一心にパソコンに何かを入力している。ここから、見えるだけで、およそ十人。部屋の広さから考えると、全体で四十人はいるのだろうか。こちらに気づいているのか、それとも、気づかないふりをしているのか、全員が画面を食い入るように見つめているその様は異様だった。

その時だった。階上からも、階下からも、足音が聞こえた。俺はさつき割った窓から飛び降りようとしたが、ひっかかることがあってそれを思いどもった。

人間の目と言うものは、盲斑のように、見えない所があると、周囲から予想してそれを補う性質があるらしい。

俺はドアを勢いよく開けた。そうすると、案の定、ドアを少し開けた時に視界に収まる範囲には人がいるが、他の場所には等間隔にパソコンがあるだけだった。白衣の連中は、先刻見た時とは違って、銃を手にしてはいるが、まさか俺がドアを開けるとは思っていないかったのか、驚いて固まっている。俺はそいつらを見捨て部屋を横切り、正面の窓を銃で割ると、下を確認して飛び降りた。そして、下の階、つまり二階の、窓の上についている屋根に掴まった。上を見上げると、白衣の連中はやっと金縛りから解けたのか、窓から下を覗いて、たどたどしく、俺に銃の照準を合わせようとしている。俺は逆立ちをするようにして、足を振り上げると、勢いをつけ足を振り下ろした。左手は手当てしたおかげでだいぶ痛まない。そして、窓を割りつつ、二階の部屋へ降り立った。

第九話：規則（前書き）

この話は作者としては満足な出来です。（自己満？）

第九話：規則

俺が二階に降り立つと、ガラスの割れる音を聞きつけたのか、

「二階だ！」

などと言う声が聞こえた。二階はやはり薄暗く、俺の背丈程もあるオブジェらしきものが、これもまた等間隔にならんでいる。

俺は直接は人を殺せない。

特に相手の目を見てしまつては。相手の目に宿る、懸命に生きようとする命の燈を見てしまつては。それを直視して、果たして、人を殺せる奴はいるのだろうか。少なくとも、俺はできない。昔、仲間の一人に、人殺しの罪にさいなまれ、自ら目を潰した奴がいたことを思い出した。目を潰す直前のそいつの狂気に満ちた目が、俺が最後にそいつを見たときに放たれた

「あなたと出会わなければよかった！」

という言葉が、今だに焼き付いて離れない。

俺は我に返ると、頭をふつて、過去の残像を消し去った。敵は、俺の明るい所では特に人を殺せないという弱点を知っているのか、しきりに、

「明かりをつける！」

とわめいていた。しばしの混乱の後、明かりがつけられると、俺は部屋の全貌を見渡すことができた。

巨大なオブジェは、チェスの駒を模したもので、チェスの盤を模して描かれた床の上に置かれていた。何がしたいのかよくわからない部屋だ。ずっと放置されていたのか、厚く埃が積もっている。さらに、どこかの水道管が破裂しているのか床は水浸しだった。

明かりがつけられ、敵が俺の位置を把握する前に、俺は部屋中の蛍光灯を割った。いきなり、また暗くなってしまう、敵はパニックに陥っているようだった。そして、何を血迷ったか、ペンライトを持ち出してきた。それでは、俺に自分の居場所を教えているようなものだ。

俺は、威嚇のために敵の足があるであろうあたりを狙って、撃つ。不幸にも標的となってしまった奴らが、大げさに騒ぐせいで、さらに混乱はひどくなった。

そして、入り口にたむろしている敵を散らそうと、俺が放った威嚇射撃は見事に裏目に出た。我先に逃げ出そうと、入り口に密集し出したのだ。ついには、銃を乱射し出す奴も現われる始末だ。俺はそれを避けるため、また、敵を散り散りにするため、部屋を縦横無尽に走り回り、様々な方向から、銃を撃った。

だが、俺は、最も重要な存在を忘れていた――。

それを繰り返して、敵が散り散りになってきた時だった。暗闇からいかなり手が飛び出し、俺の胸ぐらを水平に打った。俺は、走っている勢いも手伝って、バランスを崩すと、後方に飛ばされ、壁に当たると止まった。

俺は目を開けると、前方で銃口を俺に向け、口角を吊り上げているらしい人物を睨んだ。

「瀬野！！」

そして、自分の無鉄砲さを呪った。と、同時に疑問が湧いてきた。

「どうして、俺の位置がわかった？」

「水だよ。」

「水？」

「ああ。人間の関節はある程度までしか曲がらない。つまり、範囲が限られるだろ。だから、無意識の行動だとしても、そこには規則

性が生まれる。で、おまえが走ると同時に跳ねる水の音を拾い出して、おまえの位置を予測したってわけだ。」

俺はそれを聞いて、啞然とした。そんなことが、果たして、人間に可能なのだろうか。俺は俄かには信じられなかった。だが、目の前の人物は実際にやってのけたのだ。仮に、俺がパソコンやオブジェや建物の造りから、規則というものが連想できたとしても、瀬野の行動を予測することには到底結び付かなかっただろう。それ程瀬野の行動は非現実的だった。

「じゃあ、あの女は噛ませ犬だったってことか。」

「いや。彼女には少なくとも期待はしてたさ。けど、彼女がこちらの作戦どちらに重みを置くかと聞かれたら、こっちだろうな。」

乾いた笑い声が聞こえた。つまり、瀬野は全てわかっていたと言うことだ。俺があの子を降すことも。三階の白衣の奴らのからくりを俺が見破ることも。全てはこの一瞬のために、仕掛けられた罠だったのだ。俺はまんまと瀬野の手の平で踊らされていたわけだ。

「俺を倒すためなら、自分の女まで利用するのか。」

「あいつは俺の女じゃねえ。あいつが勝手に言い寄ってきただけだ。使えるものはなんでも使う主義なんですね。あいつは利用価値も高かったからな。ありがたく利用させてもらったさ。惚れてる男の役に立ってあいつも本望だろ。」

そう言うともた笑った。嫌な笑い方だ。

「冥土の土産になったか？じゃあ、チエックメイトだ。」

そう言っと、瀬野は引き金に手をかけた。弾丸は俺の左胸を貫いた――。

第九話：規則（後書き）

もしかしたら、明日は時間がなくて、投稿できないかもしれません。
できるだけ努力は致しますー

第十話：決着（前書き）

お待たせして、申し訳ありませんでした。え？誰も待ってない？聞こえない？。

第十話：決着

ドン――。

銃声が聞こえるとともに俺の体が揺れた。俺は脱力したように、ぐったりとする。

月明かりが二人を照らしていた。

「たわいもないな。」

そう言くと、瀬野は俺に背を向けた。

俺はその時を待っていた。瀬野が背を向けた瞬間、瀬野の右手と両足を続け様に撃つ。瀬野がその場に崩れ、右手に持っていた銃が瀬野の手から落ちる。俺はすぐ様立ち上がると、銃を蹴って瀬野の手の届かない所へとばした。そして、瀬野へ銃口を向ける。今度は俺が口角を吊り上げる番だった。瀬野が疑問を口にする。

「なぜだ。確かに撃つたはず――。」

「これだよ。」

苦々しげに言う瀬野に、俺はディスクの入っているケースをちらつかせて答えた。

「これはどんなに銃ぶっぱなそうとも、ほとんど傷ひとつ付かねえ

んだ。すげえだろ。」

だが、瀬野はこの場に及んでも、至って冷静だった。さすがといったところか。

「俺をどうする気だ。どうせお前には殺せねえだろ？」

瀬野は薄ら笑う。月明かりに浮かぶその笑みは憎らしい。

「ああ。だからこうする。」

そう言うと、俺は瀬野の顔を思いきり殴った。さすがの瀬野もこれは効いたらしい。微動だにしなくなった。俺は完全に瀬野が伸びていることを確認すると、出口へ歩を進めようとした。そこで、俺は気付くと後悔した。なんだか今日は後悔することが多い。

「山田さんの居場所聞き忘れた。」

俺は独り言ちる。周りを見渡すと、瀬野がやられたのに気付いて、我先にと逃げ出したのか、敵はいないようだった。しかし、よく目を凝らして見ると、隅で動く影が一つ。俺はその方へ向かって行った。

そいつは、この暗闇でもそれとわかる程震えていた。そいつは俺に気付いたのか、ひつ、と悲鳴を上げた。そして、どうか命だけは、と命乞いをしてきた。俺はそいつの胸倉を掴むと、

「おい！人質の場所教える！」

と脅し、山田さんの居場所を聞き出した。そいつによると、山田さんは屋上にいて、鍵は瀬野が持っているとのことだった。俺は瀬野が伸びている所に戻ると、瀬野の懷をあさり、鍵を探した。そして、見つけると屋上へ走った。

俺は屋上の扉を開けた。とたんに射す光りに目を細める。そこには一台のヘリ。それが丁度着陸しようとしていた。そして、そのライトを背にして立っているのは山田さんただ一人――。

第十話：決着（後書き）

バレバレな展開でしたかね？次話で第一部完結です。

第十一話：崩壊（前書き）

第一部（仮）完結です！ここまで読んで下さった皆さん、本当にありがとうございます。

第十一話：崩壊

「やっぱり、そうだったのか。」

僅かばかりの希望も断たれて俺はうなだれる。

「データ見たんだろ？なんでここに来た？」

山田さん、もといPrayer（祈る者）は言う。

そう、俺が手に入れた機密事項、それは、Prayer（祈る者）が敵と通じているというもの――。

「信じたかったからだよ！なんでだよ！？組織に誰よりも忠誠を誓ってたあんたが！なんで！？」

俺はすがり付くように言った。

「うるさい！！おまえに俺の気持ちがわかるか！？ずっと、組織に尽くしてきて、なのに、Prayer（祈る者）と罵られる俺の気持ちか！」

悲痛な叫びだった。俺は何も言えずに黙りこむ。しばしの沈黙の後、俺はどうにか声を絞りだすと、言った。

「それでも、それでも、俺は、知ってる。あんたがどれだけ組織のために力を注いできたか。周りのみんなだって、本当はわかってる。ただ、何においても、完璧だったあんたを、ちょっとからかいたかっただけなんだ。」

「ああ、知ってるさ。」

「なら！」

俺はPrayer（祈る者）の言葉が終わるのを待たずに言った。

Prayer（祈る者）は続ける。

「けどな、気付いた時期が遅すぎた。俺が組織を裏切ったのは、何も一、二年前の話じゃないんだよ。それにな、長いこと向こうの組織にいて、向こうの言い分もわかって、俺は何を信じればいいのかわからなくなった。聞けば、聞く程、向こうの考えの方がもっともらしい気がしてな。」

「じゃあ、もしかして、俺に情報を洩らしたのはわざとか？」

Prayer（祈る者）は俺の返答に答えず、ふっ、と笑みを零すだけだった。

「なあ、俺と一緒に来ないか？」

Prayer（祈る者）の言葉に俺は即答した。

「断わる。俺はハナから組織なんか信じちゃいねえ。だから、あんたみたいに失望もしない。」

「そう言うと思ったよ。セノはおまえを仲間にしたがっていたがな。」

「だから、あんたを誘拐して、それを俺に迫わせるようなまどろっこしい真似をしたのか。大体なあ。わざとらし過ぎんだよ。der Damon（鬼神）とまで呼ばれた男があんな簡単に捕まるなんて。」

俺はため息をついた。

「確かにな。」

そう言つてPrayer（祈る者）は苦笑する。俺は言葉が続けた。

「それに、瀬野の申し出なら尚更だ。あいつとは馬が合わねえ。」

「それもそうだ。」

俺達は笑い合っていた。空気が昔に戻った気がした。今後は、一生戻ることはないだろうけれど――。

空気が張り詰める。俺達は笑うのをやめた。俺は銃を構えると銃口をPrayer（祈る者）に向けた。

「あんたは俺が殺す。」

Prayer（祈る者）は口角を吊り上げる。それは、相棒としてのそれではなくて、敵としての笑みだった。

「おまえに出来るか？」

俺は、引き金に手をかけた。けれど、それを引くことは叶わなかった。そうしている間にPrayer（祈る者）はへりに乗り込む。

「今度おまえと会ったら、俺はおまえに容赦しない。だから、おま

えも覚悟を決める。」

そう言い残すと、俺の待てと言う制止も虚しく、へりは夜空へ飛び立った。俺はただ、小さくなっていくそれを見送ることしか出来なかった。

俺は結局なにも守ることは出来なかった。今までみたいに、大切な物はいくらもしっかり掴んでいても、手の間から零れ落ちていくんだ。守護神は迷える小羊がいたとしても、手をこまねいて、見守ることしか出来ないのだろうか――。

第十一話：崩壊（後書き）

まずは、読者のみなさん、ここまで、作者の駄文を読んで下さりありがとうございます。ありがとうございました！ここで、重要なお知らせがあります。実は当初の目的では、ここで物語は終わらせるはずでした。けれども、書いているうちに愛着が湧いてきて、今続きを書くべきか、悩んでいます。取り敢えず、書きたい短篇（これは守護神とは関係ありません。）があるので、それを書きつつ、続きを書くかどうか考えようと思います。なので前書きでは（仮）となっております。作者の気紛れに振り回してしまつてすみません。では、またお会いできることを祈りつつ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8603c/>

守護神

2010年12月31日18時37分発行